

「その広さ、長さ、深さ」

エペソ人への手紙 3 : 18 - 19

April.30.2023

エペソ人への手紙 3 : 18 - 19 (パウロ)

Preface

先週は、「人知をはるかに超えたキリストの愛」について考えました。

今朝は、説教題にありますように、キリストの愛の広さ、長さ、深さについて考えていきたいと思っております。

「あれ、おかしいな？」とお気付きになった方もいらっしゃると思いますが、聖書の順番では、その広さ、長さ、高さ、深さとなっていますが、高さについては次回考えていくことにし、今日は、キリストの愛の広さ、長さ、深さについて聖書が語っていることを黙想していきたいと思っております。

Part One

まず、なぜ使徒パウロが、キリストの愛を語るにおいて、建物の寸法を連想させるような広さや長さや高さや深さという言葉を用いて言い表しているのかということなのです。

ここでよくよく聖書を読んでみますと、パウロが、ただ何となく、漠然とその大きさを表現するために、長さとか広さとかという寸法を表す言葉を用いているのではなく、しっかりと明確な意図があつて、広さ、長さ、高さ、深さという言葉を用いているのが見えてきます。

特にこの表現が、キリストにあつて救われた者たちの群れが、霊的に、つまり、神様の視点から見て、人間が定めた尺度では計り知ることの出来ない大きさを誇っているということを念頭に置いた表現だということが見えてきます。

エペソ人への手紙 2 : 19 - 22 (パウロ)

要するに、使徒パウロがイメージしている広さや長さや高さや深さという表現は、聖書の御言葉を土台とし、イエス・キリストが要の石となつて、キリスト者一人一人が組み合わせられ、キリストを中心とした一つの大きな建物のようなキリストと神と一体の存在にされていることを思つての表現だということなのです。

普通建物というのは、生物のように生活機能を持つ有機体ではなく、生活機能や生命力を有さない無機物ですが、御言葉を土台とし、イエス・キリストを要の石として、私たち一人一人のキリスト者が組み合わせられて建て上げられたこの聖なる建物は、生命のない無機物ではなく、永遠のいのちを有する有機体とされました。

つまり、生活機能を持つ生命共同体ですね。

では、無機物が何によって、生命力を持つ聖なる建物、生命共同体となつたの

か？

聖霊によってです。 御霊によってです。

御父、御子、御霊なる三位一体の神様は、聖なるお方であるがために、私たちどこを切っても罪しか出て来ない罪人とは、どんなに一緒になりたくても、どんなに交わりたくても、水と油どころか、光がそうならないようにどんなに気を使ったところで、光が照らされたところには闇は一点たりとも存在し得ないように、神と私たち罪人が同伴、同居することは、物理的にも不可能なことですし、当然、霊的にも不可能なことでした。

ところが、主イエス様の十字架の贖いという人知をはるかに超えたウルトラC、秘策、奥の手ゆえに、神と人が共に居、神と人が一緒に出来、しかも、神が私たち人間を宮として、御住まいとして住んでくださることが出来るようになりました。

それが、22節、21節にある「御霊によって神の御住まいとなる」、「主にある聖なる宮」となるということです。

しかも、この「神の御住まい」と「主にある聖なる宮」は、私たちキリスト者一人一人が「神の御住まい」と「主にある聖なる宮である」と同時に、一人一人のキリスト者が組み合わされて成るものでもあります。

私たちキリスト者は、誰一人として自分一人で存在出来るような者ではなく、お陰様での生命共同体であり、「あなたのおかげで、私のおかげで、お互いにキリストに会って喜んで存在出来ていますね」という人間本来あった姿を取り戻させて頂いた有機的生命共同体です。

罪を犯してエデンの園を追放されてからの人間世界は、イエス様が仰ったように、「自分は正しいと確信していて、ほかの人々を見下している人たち」だらけで、私たち一人一人がその当の本人で、罪深い罪人で、競争し、闘争し、分断し、断絶し、絶縁するという人間同士の霊的繋がり、つまり、まことの神を中心とした繋がりという生命力を失った者たちの群れでありましたが、そんな私たち罪なる人間を綺麗に一掃してまっさらな状態からもう一度新たに始めなされることも神様は十分にお出来になるお方ですが、そうはされなかった。

むしろ、私たち一人一人に愛着をもって、愛着どころか、天の御使いたちさえも驚くような一見すると狂気の沙汰と言っても過言ではないほどの執着と表現しても足りないぐらいの熱心をもって、愛をもって、罪人なる私たちをもう一度新たに、聖霊宿る聖なる建物、御住まい、宮として下さいました。

キリストにあって組み合わされた一人一人による建物、私たち信仰生命共同体である教会、聖なる神の宮のうちに、キリストの愛が、人知をはるかに超えたキリストの愛が、その愛の広さが、長さが、深さが、高さが、ぎっしりと、ギュッと詰まっており、表れているということです。

私たち救われた者たち、キリスト者一人一人に、キリストの愛の広さ、長さ、深さ、高さが、ギュッと詰め込まれているということです。

Part Two

では、そのうちの一つ、「広さ」という言葉をもって言い表しているものは何でしょうか？

ヨハネの黙示録を見ますと、キリストの愛の広さとは、イエス・キリストの血の洗いをもって救われた者たちの数の多さ、人種や文化や分断を超えたとしてつもなく広い範囲の人々に起こった、そして、これから起こるキリストの救いが及ぶ領域の広さについての表現だということが見えてきます。

ヨハネの黙示録5：9－14（パワポ）

部族、言語、民族、国民を超えたとしてつもなく広範囲の人々に与えられたキリストの血の洗いによる贖い・救い、さらには、人間のみならず、万の数万倍、千の数千倍と言い表すことも出来ないほどの御使いと言われる天の霊的存在に加え、天と地と地の下と海にいと表現されてはいるものの、実際は表現し尽くすことの出来ないすべての造られし被造物たちも諸手を挙げて神のキリストにある救いのわざをほめたたえている姿があります。そして、

ヨハネの黙示録7：9－12（パワポ）

「だれも数えきれないほどの大勢の群衆」と言われる神の子羊イエス・キリストの救いに与った者たちの姿があります。

「だれも数えきれないほどの大勢の群衆」です。

私たち日本でクリスチャンやっていると、どこに行ってもマイノリティーな超少数派で、そのクリスチャンの数の少なさに滅入ってしまいそうになることもあれば、そのマイノリティーゆえか、知らず知らずのうちに世の価値観や宗教観に感化されて、混合主義的信仰に陥っていることにも気付かなかつたりすることもあるほどに、クリスチャンのパーセンテージが少ないことは、私たちにとって時折、または常に、失望感と言いましょか、やるせなさや落胆のようなものをもたらしたりもします。

しかし、神の視点で見、または、天の御国の視点で見たクリスチャンは、圧倒的マジョリティーであり、霊的絶対多数であり、主流であり、本流であり、メインストリームです。

そして実際に、数えきれないほどの大勢の群衆であり、その群衆の一員に入れられているのが、私たちキリスト者です。

2000年前当時、ヨハネの黙示録を記録したヨハネも、使徒パウロも、この地上世界においては圧倒的少数派でありました。

しかし、神の視点からは、天の御国の視点からは、絶対的多数派でした。

この幻のうちに見せられた天の軍勢の姿は、どれほど、彼らにとって勇気となったことか！

それによって、大胆になり、心を強められたことか分かりません。

キリストの愛の広さは、高々、日本という小さな国の土浦という小さな都市の土浦めぐみ教会という小さな群れに収まっているような小規模のものではなく、絶対的多数の広さを持っている真理です。

キリストに出会う前のユダヤ人使徒パウロもそうでしたが、旧約聖書で語られているとてつもなく広い福音、広い神の救い、広いキリストメシアによる贖い、広い神の愛をユダヤ・イスラエル民族という小さな小さな範囲内だけに収めてしまい、その小さな範囲内だけに留めて置こうとしたのが、イスラエルの民たちが失敗したもっとも大きな原因とも言えるでしょう。

外向きよろこぶ教会ではなく、内向きなあなあ教会が、旧約時代のイスラエルの姿でした。

戦いに勝つために、神の言葉が刻まれている2枚の石板が収められた契約の箱を戦場に持ち出せば、その戦いに勝てるというお守り程度にしか、神主のお祓い程度の狭いご利益信仰程度にしか、神の言葉を、神の存在を、神の愛を解釈出来なかったそんな狭いイスラエルの姿は、今の私たちにもあるかもしれません。

でも、そんなちっぽけなものが、キリストの愛ではありません。

罪と地獄と悪魔の存在にもかかわらず、私たちはやがて、キリストにある愛がとてつもなく広い範囲で成就するということを悟り、その栄光を目の当たりにした時、私たち誰もが驚愕することでしょう。

私たちは、「私が救われてラッキー、救われて心がハッピー、救われて心がなんだかほっこりする」程度で満足することばかりに執着するのではなく、(もちろん、それも大事なことですが、それよりも)前を見て、先を見て、来たるべき時を見て、かの日を、その日を見据えて、神の栄光を見、主なる神様が成し遂げられる最終的な救いの結果を知りつつ、今日という日を信仰を持って生きるのです。

キリストの愛の広さを念頭に置いて生きるのです。

キリストの愛の広さをもって、物事を見、判断し、待つのです。

私たちは、その広い広い天の軍勢の一員であり、神の子羊なるイエスの前で、永遠に過ごし、永遠に喜ぶ特権に与った者とされた尊い存在です。

キリストの愛の広さは、私たちを一つに結びつけると同時に、私たち一人一人の尊さを示してくれています。

Part Two

次に、その長さについて考えたいと思います。

ここで言う長さとは、所謂、丈が長い短いという意味ではなく、時間的概念と一貫性を表しています。

どういう時間的概念と一貫性なのか？

永遠の前から永遠の先までという時間を超越した時間的概念と、変わらない、変わることがないという一貫性です。

では何において、一貫性があり、その一貫性が永遠の前から永遠の先までなのか？

神の愛がです。 キリストの愛がです。

キリストの愛は、私たちが気付こうが気付くまいが、永遠の前からあり、永遠の先まであります。

その愛に、その長い愛に、私たち入れられています。

エペソ書1章で何度も見て参りましたが、「神は、世界の基の置かれる前から、キリストにあつて私たちを選び」と、ある通りです。

先週も触れましたが、マラキ書の3：6には、「主であるわたしは変わることがない」という神様の言葉があります。

では、何において変わらないのか？

同じマラキ書の1：2で、「わたしはあなたがたを愛している」と神様仰います。

つまり、愛において変わらないのが神であり、永遠に一貫したその愛の体現がキリスト・イエスです。

そして、そのキリストの愛の長さを聖書的に表現しているのが、ヘブル書13：8です。

ヘブル人への手紙13：8 (パウロ)

(2回読む)

イエス・キリストは、昨日も今日も、いつまでも、永遠に変わることがありません。

物凄い宣言です。

聖書における神についての描写の中で、最も多く出て来る表現は、「愛」という表現です。

「神は愛なり」、「神は愛です」、「主は愛しておられる」と、神様の、イエス様の愛については、ここにいる私たち誰もが知っています。

ではなぜ、またさらに、しつこいほどに、「長さ」という言葉を用いて、昨日も今日も、この先も変わることのないその愛を言い表そうとしているのか？

それは、ともすると、信仰の根拠を「神から私へと」ではなく、「私から神へと」、私という人に信仰の根拠を置こうとしてしまう私たちには傾向があるからですね。

つまり、こういうことです。

私が神様に対して熱心であれた時には、神様は私のことをさらにもっと愛して下さっているように感じ、私が失敗した時には、神様はもう、もはや、私のことを愛しておらず、むしろ憎んでおられるのではないかと思えてしまいます。

そして、不安になります。

「果たして、神様は、こんな私のことを、今も変わらず愛しておられるのだろうか？」

私（たち）の足りなさ、欠けだらけにも関わらず、神は私（たち）のことを、一貫して、変わらず、いつでも愛しておられるという確信を持つことは思う以上に困難だということです。

真面目な人であればあるほど、そういう傾向にあるかもしれません。

現実問題、「これぐらいなら、まあクリスチャンとして合格点だろう」と、自分でも思ってしまうような信仰生活を送れる日なんか、そうそうありません。

1年365日のうち、360日は失敗し、まあよくて5日ぐらいしか、「これぐらいなら信仰者として、クリスチャンとして、まあいいんじゃないかなあ！」と思える日がありません。

そして、不安になります。

「愛されるのに値しない、恵みを受けるのに値しない、神様にほめられるのに値しない人間だ」と、自分の定める信仰的、または宗教的水準に達していないという自責の念が、大なり小なりずっと付いて回ります。

もちろん、だからと言って、神に対して熱心である必要がないと言おうとしているのではなく、どんなに熱心でありたくても、私たちの罪ある熱心には正直限界がありますし、私の熱心に頼る信仰ならば、そんな信仰、成り立つわけがないということを私たち、経験上、もうすでに気付いております。

そんな私たちに語り掛けて下さる言葉が、ヘブル書13章の言葉です。

（私が読みますので、何を語り掛けておられるのかを考えながら、心の内で目で追ってみてください。）

Part Three

ヘブル人への手紙13：1-8（パウロ）

この聖書箇所を要約するならば、「苦しいから、つらいから、痛いからといって、神様が愛しておられないからだなんていう妄想は捨てなさい」ということです。

「神様は、決してあなたのことを見放さず、あなたを捨てることなんか一切ないから、自分だけ良ければそれでいいなんていう生活を目標に生きるのは辞めなさい。

あなたも痛かったことがあるでしょう。ならば、痛い人の痛みを理解して上げなさい。

お金や所有が無きゃ無いで、それはそれで大丈夫だから。

失敗とか、苦しみとかが、神の愛の途切れではないから。

神様はあなたを愛していることをひと時もお辞めになったことなんか無いし、イエス・キリストは、とこしえからとこしえまで、変わることはないお方だから、安心して、どんな時も兄弟愛を持ちなさい」と、「キリストの愛の一貫した長さゆえに、寛大さと余裕をもって大丈夫だから」と勧めてくれます。

もし長さというのが、ぶつぶつ切れていて、そのぶつ切れがどんなに長く並んでいたとしても、それは、長いということにはなりません。

一瞬たりとも空白期間がなく、世界の基が置かれる永遠の前から意図してご計画なさり、そうして今に至り、先に至り、永遠に至るまで、「愛」という長い関りの中に私たちを抱いて下さっているというのが、キリストの愛の長さです。

その愛の空白の無さといったら、苦しみの中にあつたヨブの言葉を借りるならば、「いつまで、私から目をそらしてくださらないのですか。唾を飲み込む間も、私を放っておいて下さらないのですか」というほどです。

イエス様は、私たちのことをしっかりと知っていて下さいます。

放蕩息子の例え話に表れている真の主人公は、ひと時も目をそらさず、放蕩息子のことを思い続けている父親でしょう。

キリストの愛は、私たちを放棄することを知りません。

それが、キリストの愛の長さです。

Part Four

そして最後に、キリストの愛の深さです。

キリストの愛の深さを最もよく分かりやすく記している聖書箇所は、ピリピ書2章の言葉でしょう。

ピリピ人への手紙2：5－8（パウロ）

私たちが良く知っている、何度も聞いてきた見てきたはずの御言葉ですが、実のところ、ここで言い表そうとしているキリストの愛の深さは、私たちには、到底理解しきれないものであります。

正に、人知をはるかに超えた愛です。

イエス・キリストは、神です。

神の御姿なるお方が、被造物である人間の姿をとって、この罪なる世界に、罪

なる人間の胎を通して、罪なる人々の真っ只中に現れなさいました。

しかもその現れ方は、所謂栄光ある、由緒正しき崇高な現れ方ではなく、泊まるところもなく、命辛々逃げ惑い、しかも社会の最底辺・最貧困層の人として、世間の人々からも、「あんな家の出で！」なんてことまで言われてしまうような、白い目で見られるようなところで生きました。

この上もないお方が、ご自分をこの上もなく低くされました。

意図して、神としてのすべての権利をお捨てになり、放棄され、低くなられました。

ここに、深さが、深みが現れるわけです。

そしてさらに、その深さは、増し加えられていきます。

罪人の手によって、罪なきお方が受難し、誤解を受け、嫌悪と敵対心と悪意を受け、疲労と空腹と喉の渇きと苦しみをお受けになりました。

不法に逮捕され、嘲笑を受け、その光輝く聖なるお顔に唾を吐きかけられ、こん棒で茨の冠をかぶせられた頭を流血しても殴られました。

一度打たれるだけでも、肉がえぐり取られるような鞭で鞭打たれ、正当な、真つ当な理由もなく十字架を担わされ、手と足に五寸釘よりもはるかに大きな釘を打たれながら、こらえ切れない痛みと共に、自らが担った十字架にはりつけにされ、殺されました。

苦悩と苦痛をもって叫ばれ、死んでいかれました。

人間のありとあらゆる残忍さ、ずるさ、汚さ、浅はかさ、無能さの前に殺されました。

そして、人間のありとあらゆる残忍さ、ずるさ、汚さ、浅はかさ、無能さの前に殺されたことを通して、聖書の御言葉が真実であることを、聖書の言葉に記されている人間の描写が紛れもない事実であることを明らかになさいました。

ローマ人への手紙 3 : 10 - 19 (パウロ)

誰もが残忍で、ずるくて、汚くて、浅はかで、無能な罪人であり、すべての人のみならず、その罪深いすべての人々によって作られてきたこの世界も、神の裁きに服して当然であることを、イエス・キリストの十字架の死は明らかにしました。

そして、その罪深さを認めれば認める程に、自らの罪深さを考えれば考える程に、気付けば気付く程に、熟考すれば熟考する程に、キリストの愛の深さが明らかになります。

そのキリストの愛の深さの底なし具合が、分かり、見えてきます。

では、なぜ、ここまでイエス・キリストはなされたのか？
それは、私たち一人一人に対する愛ゆえです。
私たち一人一人を深く深く愛しておられるからです。

私たちがまだ罪人であり、神に敵対していた時にキリストは、私たちのために死なれたことによって、その愛を明らかになさいました。

明らかにされたことを知ってもなお罪人であり、敵対しているかのような生き方をしてしまう私たちをなおも愛して、その愛に気づき、悔い改め、向けていた背中を向き直すことを決して諦めることなく期待し続けて下さっています。

私たち罪人のために天の御国という高いところから来られ、死という、よみという燃えるゲヘナという深みにまで行かれたほどの愛が、キリストの愛です。

そのキリストの深い愛に気づき、悟り、考え、黙想すること以上に、私たちの魂を、霊を、精神を、肉体を元気付けるものはございません。

Conclusion

「キリストの愛は、どこにあるのだろうか？」と疑問を持ちやすい私たちですが、キリストの愛は、いつも、そこにあります。

その現場にあり、私という人のすべてにあります。

間違っているのは、いつもこちら側、いつも私たちです。

私たちがその愛を知らず、気づけず、黙想せず、その愛の広さ、長さ、深さを理解出来ないところに誤りと間違いがあります。

キリストの愛は、広く、長く、深い愛です。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ 3：18－19